

河童小僧

岡本綺堂

青空文庫

頃は安政の末、内藤家（延岡藩）の江戸邸に福島金吾という武士があつた、この男、剣術柔術が得意で、随つて氣象も逞しい人物で、凡そ世の中に怖い物無しと誇つていたが、或時測らず一種の妖怪に出逢つて、なるほど世には不思議もあるものだと思つて流石に舌を巻いたと云う。即ち五月の初旬、所謂る降りみ降らずみ五月雨の晴間なき夕、所用あつて赤阪辺まで出向き、その帰途に葵阪へ差掛ると、生憎に雨は烈しくなつた。

当時の人は御存知あるまいが、其頃は葵阪のドンドンと云つては有名なもので、彼の溜池の流れを引いて漲り落つる水勢すさまじく、即ちドンドンと水音高く、滝なすばかりに渦巻いて流れ落つる水が、この頃の五月雨に水嵩増して、ドンドンドウドウと鳴る音物すごく、況して大雨の夜であるから、水の音と雨の音の外には物の音も聞えず、往来も絶えたる戌の刻頃、一寸先も見え分かぬ闇を辿つて、右のドンドンの畔へ差掛ると、自分より二三間先に小さな人が歩いて行く。で、自分は足早に追付いて、提灯をかざして熟視ると、年のころは十三四の小僧が、この大雨に傘も持たず下駄も穿かず、直湿れに湿れたる両袖を掻合せて、跣足のままでびたびたと行く姿、いかにも哀れに見えるので、オイオイお前は何処へ行くと脊後から声をかけたが、小僧は見向きもせず返事もせず、矢はり俯向きし

まま湿ぬれて行く、此方こなたは悶じれて、オイオイ小僧、何処へ行くのか知らぬが、斯この降ふる雨りの尻しりも端折はだしらずに跣足はだしで歩く奴があるものか、身軽みかろにして威勢いせい好よく歩あけと、近寄ちかって声こゑを掛かけたが、この小僧やはり何とも云いわぬ。唾つよか聾耳ろうじか、さりとは不思議ふしぎな奴、兎も角もそんな体裁だうしない風ふうをして雨あめの中なかを歩あく奴があるものか、待まちて待まちて、俺おれが始末しまつをして遣やると、背せ後ごから手てを伸のびて其その後うしろづま、褌ふんどしを引ひあげ、裳ももをクルリと捲まぐる途端とにピカリ、はツと思おもつて目めを据すえると、驚おどろくべし、小僧の尻しりの左右さゆうに金銀きんぎんの大きな眼まなこがあつて、爛らん々々として我われを睨にらむが如ごとくに輝かがいでいるから、一時ひとときは思おもはず悸然ぎよつとしたが、流石さすがは平生へいぜいから武芸ぶげい自慢じまんの男おとこ、この化物め奴めと、矢庭やにわに右みぎ手に持もつた提灯ていとうを投なげ捨すてて、小僧の襟えり髪かみ掴つかんで曳ひとばかりに投なげ出すと、傍かたえのドンドンの中なかへ真ま逆さかさまに転まげ墜おちて、ザンブと響ひびく水音みづね、続ついて聞きゆるはカカカカと云いうような、怪あやしい物凄ものぢい笑わらい声こゑ、提灯ていとうは消きえて真まの闇くら。

汝おのれ化物め、再またび姿すがたを現あらわさば真ま二つと、刀やいばの柄えいに手てをかけて霎しばしの間ま、闇くらき水中みづなかを睨にらみ詰しめていたが、ただ渦卷うずま落おつる水みづの音ねのみで、その後は更さらに音ねの沙汰さたもない。ええ忌いまいま々々しい奴やつだと呟つぶやきながら、其夜そのよは其そのままに邸やしきへ帰かえつたが、扨さてよ能よく能よく考かんがえて見みると、あれが果はして妖怪やかいであろうか、万ま一ひと我が驚おどろ愕おどろと憤いかり怒どろの余あまりに、碌さ々々に其そのの正体まことも認まめず、遣やつて真実まことの人間にんげんを投なげ込んだのではあるまいかと、半信半疑はんしんはんぎで其夜そのよを明あし、翌朝あしたあさ念ねんの為ために再またび

彼のドンドンへ往つて見ると、昨夜に変わぬは水の音のみで、更に人らしい者の姿も見えぬ、猶念の為に他の人々にも聞合せ、流れの末をも其れぞれ取調べたが、小僧は愚か、犬の死骸さえ流れ寄つたと云う噂も聞えぬ。で、若し真実の人間とすれば、右の如き大雨と云い夜中と云い、殊に彼のドンドンの如き急流の深淵に於て、逆も無事に浮び上れよう筈も無し、さりとて其死体の見当らぬも不思議、正しく彼の小僧は河童であろう、イヤ瀬であらうと、知る者何れも云い伝えて、其当分は夜に入つて彼のドンドンの畔を通る者も無い位で、葵阪のドンドンには河童が住むという評判盛であつたが、其後別に怪しい噂も無かつたのを見れば、河童小僧、飛んだ目に逢つて懲々したのであらうか、兎にかく其小僧の尻に金銀の眼が光つていた事は、福島金吾確かに見とどけたと云う事。

因みに記すも古めかしいが、右の溜池界限には猶一種の怪談があつて、これも聊か前の内藤家に關係があるから、併せてここにお話し申そう、慶応三年の春も暮れて、山王山の桜も散尽くした頃の事で、彼の溜池の畔に夜な夜な怪しい影がボンヤリと現われる。もつとも其頃の溜池は中々広いもので、維新後に埋められて狭くなり、更に埋められて當時の如く町家立ち続く繁華の地となつたが、慶応頃の溜池は深く広く、其末のドンドンには前記の如く河童小僧さえ住むと云う位、其の向う岸即ち内藤家の邸の裏手に當つて、影と

も分かず煙とも分かぬ朦朧たる物が、薄墨の絵の如くに茫として立迷っているのを、通行人が認めて不思議不思議と云い囁す、其の評判を同邸の家中の者が聞伝えて、試みに赤坂の方へ廻つて見渡すと、何さま人の噂に違わず、影か幻か朦朧たる物が水の上に立っていて、其の形さながら人の如くであるから、何れも唯だ不思議だ奇怪だと云うのみであつたが、念の為に小舟を漕ぎ出して其影の辺に近づいて見ると影は消えて何にもない、扱又旧の岸へ帰つて見ると、彼の影は依然として水の上に迷っている、これは恐らく水中に何物か沈んでいるのではあるまいかと、一同協議の上で、その翌る朝更に小舟を漕ぎ出し、夜な夜な影の迷う辺を其処か此処かと棹で探ると、縁伸びたる芦の根に何か触る物がある、扱はと一同立騒いで直ちに此れを引きあげると、思いきや此れは年頃二十三四とも見ゆる町人風の男で、荒縄を以て手足を犇々と縛られたまま投込まれたものと覺しく、色は蒼ざめ髪は乱れ、二目と見られぬ無残の体で、入水後已に幾日を経たのであろう、全身腐乱して其の臭気夥多しい、一同アツと顔見合せたが兎も角も其死体を昇き上げ、上に其次第を届け出でて、それぞれ詮議に手を尽したが、この男は何者とも分らず、随つて其の死因も分らず、いわんや其の下手人も分らず、詮議も竟に其なりけりに済んで了つたとは、何ぼう哀れなる物語。で、彼の怪しい人かげは、正しく此の水死者の幽魂が夜な夜な形を現

わして、未来の救護すくいを乞うたのであろうと云う噂で、これを思えば死者に靈無しとも云われまいと、現在その死体を引きあげた一人の昔噺。世にはかかる不可思議の事もあるものか。

（『文藝倶楽部』02年5月号）

* 〈日本妖怪実譚〉より。署名は「不語堂」使用。

青空文庫情報

底本：「文藝別冊「総特集」岡本綺堂」河出書房新社

2004（平成16）年1月30日発行

初出：「文藝倶楽部」

1902（明治35）年5月号

※初出時の署名は「不語堂」です。

入力：hongning

校正：noriko saito

2004年7月15日作成

2013年8月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

河童小僧

岡本綺堂

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>